

仙台市青葉区北仙台地区民生委員児童委員協議会

(平成 27 年 7 月)

北仙台地区は、仙台市の中心部に近接した北仙台駅を中心とした地域で、マンション等が多い地域です。

忘れることのできない数々の傷跡を残した「3. 1 1」の経験ですが、3 点に絞ってご紹介したいと思います。

1. ひとり暮らしの方の安否確認

震災直後、私の担当するひとり暮らしの方を訪ねると、ベランダのガラス窓が内側に倒れ、被害はかなり大きい状態でした。「〇〇さん、大丈夫」と叫びながら、ご本人を探しました。緊急連絡先に連絡しても、所在はわからずじまいでした。後になって、病院で足止めされていたことを知り、安心しました。しかし、その方は、自宅には戻らず、東京に避難していきました。

このことから、避難する場合には、門に白タオルをかける、自分の行先を書いて貼っておく、隣人に知らせる、等の方法により、関係者への連絡を行おうということになり、訓練をしているところです。

2. 町内の集会所が近くのマンションの避難所として使用されたこと

避難所に指定されていない集会所に若い家族が何組も身を寄せ、そこから出勤、片付けに通い、夜はまた戻ってくるという状況が続きました。このことから、町内の一避難所として利用する場合には、町内で組織図を作り、自主的な運営ができるようにすることの必要性を感じています。

しかし、この共同生活が、後日、大雪の日に多くの人が雪かき作業に参加することにつながりました。逆境の経験をしたからこそ助け合いの精神が息づき始めた感があり、良い点も育っていると思われれます。

3. 弱い立場の人びとが布団を持って運ばれたこと

ひとり暮らしの高齢者や体調の悪い人、若い家族などが指定避難所ではないコミュニティセンターに集まってきました。

食料もままならない状況のなか、部屋の清掃、水くみ、トイレの清掃等は深刻な問題でしたが、なんとか話し合いで解決できました。しかし、夜中に眠れない方も出てきて、指定避難所である中学校に移動したこともありました。街灯もなく、真っ暗な道を布団を持っての移動は高齢者自身も大変なことですが、それを補助してくださる方がたの苦労も大変なものでした。

このように、今まで経験したことのない非常時の対応について、仙台市当局をはじめ、各町内会でも防災組織の構築について真剣な取り組みが進んでいます。町内会の組織がしっかりしている所と、そうでない所の差はありますが、北仙台地区全体としての広域的な活動を通じ、また地区としての防災訓練等を行なうことで各町内の人びとの意識を高めようとしています。

この震災を通じ、非常時にはなにより「遠くの親戚より近くの他人」が大切であることを感じました。ご近所同士が日頃から挨拶を交わし、親しく話のできる関係を作っておくこと、そうしたお隣さんが一番大切ということを実感しました。

そして、今回のこと（震災）でたくさんの「思いやり」にも出会いました。この経験をこれからの地域活動に生かしていきたいと思っています。